長谷川周治
― 平和に生きた前垂れがけの武士 ―

Ⅰ はじめに

長谷川周治は事業の人であったので、著作と言うべきものはない。ただ一冊『偽らざるの手記』[1]という遺稿があるのみである。この手記は長谷川が最後の病床で自分の越し方を、驚くべき記憶力をもって克明に、いきいきと綴ったもので、

> 懐かしの故郷の山河、慈母の懐ろ、誰か之を思い偲ばざる。我れ病患を得て横臥すること茲に五十余日、いつ癒ゆるとも知らざれば、よき折と思い、かねてより書き残さんとせし自伝の一節、やみがたき回顧追慕の情にかられ、不完全ながらつづり誌して見ることとした。但し偽らざるの手記である[2]。

と書き始められている。

以下主としてこの手記に依りながら、永眠の折に寄せられた知友の追憶文をも合わせ用いて、長谷川周治の人物像を描き出してみたい。

Ⅱ 長谷川周治の人と事業

１．放浪の時代

長谷川周治は１８８４年（明治１７年）１０月２１日、山形市銅町に生まれた。生家は由緒ある旧家であったが、彼が育つころには漸く家運が傾きつつあった。

> 家の生活の苦しさを知っていた私は、こんなことに大金をかけて学校に行ったって何になるか、役人になるではなし実業家には学問は不要と、「実業の日本」などで立志成功の物語など好んで読んだのである。その頃とっていた万朝報や報知新聞に、内村鑑三亮生の論文や黒岩涙香の時評、それから政治家の動静など詳しく載っていたので、それをも読んで大いなる刺激を受けたものであった。……そんな次第で学校に行っても心は天下国家に飛び、こんな穴のような狭い世界でと学業は手につかなかったのである[3]。

こうして長谷川は、何としてでも家を出て広い世界で身を立てたいと願い、二度の失敗ののち、三度目ついに家出に成功、１７歳で家郷をあとにしたのであった。ここに１０数年にわたる放浪の時代が始まった。家運の挽回と家名の再興という明治の青年らしい願いと決意とが、長谷川の人と事業の第一の背骨であったと言ってよいだろう。

まず横浜へ、次いで東京へ出て、「ミツワ石鹸」の丸見屋に奉公した。徴兵検査のため一時帰郷したが、日露戦争に出征したのを機会に中国大陸まで行脚し、さまざまな仕事を試み、幾度か死線を越える辛酸をなめた。しかし結局こと志とちがって帰国しなければならなかった。彼はその時の気持を「落ちぶれて帰るその日や月清し」(4)と詠っている。

再び東京に出て半田商店鉱山部に勤務したが、その時の同僚に後の日興証券社長遠山元一がいた。主人半田庸太郎夫妻から厚い信頼を寄せられたが、生来の慎み深さと強い独立心からか、彼は主人の期待をふりはらうようにして半田商店を辞し、やがて周達社という「写字製図派出事務手伝いの仕事」(5)を起こして、ついに独立した。しかしこの印刷の仕事は長くは続かず、間もなくゴム製品製造業に着手するが、後年キリスト教出版を手がけたその志は、このころすでに胚胎していたのであろう。

これより少し前、１９１５年（大正４年）４月２４日に、長谷川は鈴木いし子と結婚した。いし子は長谷川と同じ山形市の出身、当時函館で教師をしていたが、松宮春一郎という人の媒酌で長谷川に嫁して来た。その翌年長男真太郎が生まれ、さらに２年後長女静枝が与えられた。またこの間に、柏木の内村鑑三宅の向かいへ転居した。

こうして彼は放浪の生活に終わりを告げ、いよいよ「誰にも頭をさげなくてもいい、独立自由の境涯」(6)へと進んだのである。それまでの経緯を彼は次のように回顧している。

> 以上数々の物語は、私の十七歳から三十三歳に至るまで、丸十六年の偽らざる放浪生活の大要である。身軽である為か、転々、東西南北への旅日記のようであるが、需めて得られず、得ては永続せず、併し現代社会の表面裏面、種々の各階級の端を窺い得て幸福だったと思う。人此の世に処するや、必ず若き日に於ける鍛錬なくして歩けるものではない。私の醜き生涯に於て、此の時までを波乱に富んだ一期として顧みて、神の御摂理に感謝しているのである(7)。

２．ゴム加工事業

周達社を起こして始めたこの印刷の仕事は、しかし、社員の不行跡などのこともあって「営業その物の無意味を感じ」(8)、間もなく廃業した。その後二、三のことを試みたのち、ついに生涯の事

業となったゴム加工の仕事に就くことになる。そのきっかけは、当時世界的に悪性のカゼが流行し、そのため氷枕や氷嚢がよく売れて品不足を来たしていたが、このことに目をつけた近所のある屑屋が、長谷川にぜひ一緒にこれを造って売ってみないかと勧めたことにあったという。

ゴム加工というのは「布にゴム液を塗布して、切断加工する」[9]仕事だが、長谷川は当初から氷嚢の製造に専心し、苦心の結果「薄絹に純ゴムを引いて、入口の処にゴム輪を巻きつけて（氷を）入れるに便にした」[10]特許氷嚢を作ることに成功し、これに「平和氷嚢」と名付けて売り出した。１９２１年（大正１０年）のころと思われる。「平和氷嚢」は大阪の宇都宮商店のような良い取引先を得て順調な売行きを見せ、事業は徐々に発展した。

もちろん新製品の開発には、莫大な資金を投じながら失敗するということもあったようだが、とに角事業は次第に実って、かなりの財産を持つに至った。１９２６年（大正１５年）には東京杉並区堀之内の４００坪の敷地に工場を建設し、以後第２次大戦末期に工場を閉鎖するまで、一貫してゴム加工の仕事に従事したのであった。生涯の事業であった「ゴムの仕事」に対する長谷川の気持ちは、次のことばによく示されている。

> 此処（堀之内の工場）で、第二次世界大戦の終末に到る前年まで、ずっとゴムの仕事に従事していた。その前から加算すると丸廿五ヶ年間、一貫して此のささやかな工業に終始した。否、せしめられたのであった。前には、一年毎に境遇を変えたような状態であったが、矢張り背後に神在し給うて、御摂理の下に動かせて下さるのである[11]。

３．事業の精神

長谷川が自立して自分で事業を営むようになって、何を一番喜んだかと言えば、その生活に伴う独立と自由であったことは言うまでもない。その「誰にも頭をさげなくてもいい、独立自由の境涯」[6]を、彼はいかにも彼らしく守りぬいたのであった。

人はおのおのその生き方と生活のすべてとをもって、独立とか自由とかいう大切な言葉の内実を定義するものだが、長谷川は自分の独立を「独創」と規定していたと言える。しかも彼の創意工夫は決して単なる思いつきというようなものではなく、聖書の言葉を使えば「黙示」による独創と言うべきものであった。工場の製品の中に「拾インチ天球儀」というのがあったが、その「説明書」の中で長谷川は、天球儀を作るに至った動機を次のように語っている。

> 然るに世界が日一日と物質文化爛熟の時代に変り、精神上のことに於ても、ただ伝統的のことのみ叫ばれているような今日となって来ましたから、いくら弱い私共でも黙ってばかりいられなくなって参りました。それで「空の星を見よ／武装せざる（望遠鏡を用いぬこと）

／天文を学べ／そしてこの矛盾の多き世と／複雑なる社会より心を放ち／眼を遠く天の悠久に向けよ／其処に永遠の世界と真理とがある」と、かすかながらも、叫びたくなりました。そして何かの機会にこの意を表わしたいと思っていた矢先、ふと心に浮んだ事が動機となって、この天球儀になったのであります[12]。

実は長谷川のゴム事業には、氷嚢製造とともに、この天球儀をはじめとする地球儀、ゴム風船など、こんにちの言葉で言えば教育機器の製作があった。これはまさに現代の教育産業の先取りと言ってよいだろう。彼はこれらの製品を海外に輸出しようとも試みている。商売としてどれ程成功したかは知らないが、今から半世紀も前にドイツに童話風船を送って国際親善に寄与したこともあった。

偉人づくしや、イソップ物語や発明づくし、獣の恩返しなど、和英両文の説明付で、誰が見てもわかる国際的なものであったし、日本物はまた格別の面白さがあったのであろう。エスペラント語で沢山いろいろなことを書いてよこした。欧州人などは、日本人を見ると劣等国民のように思っていただろうが、多少見直しただろうと思って嬉しかった[13]。

何にしても、自分の事業について「工場の製品は他の真似をせず、自己の発案研究にかかるものを以てした。そして成るべく意義あるもの、人を益するものを選んで製作した」[14]と言うことの出来た長谷川は、まことに幸福な実業人であった。

長谷川の事業を語る時に逸することのできない大切な点は、彼が絶対に借金をしなかったということである。これは時代が違うと言ってしまえばそれまでだが、個人の生活も事業もすべてローンと称する借金でやるのが当たり前のような現代の考え方からすると、驚くべきことである。彼は言う。

工場生活二十五年問、一日の遅滞もなく金の支払いが出来、すれすれの場合に於ても不思議に与えられて、支払を了せられたことであった。其の後十余年間の今日と雖も、それを継続して、他から借入金をしたり、依頼したりしていない。全く神の御恩恵である。

私はこれまで支払の用意なしにどんな仕事でも始めたことはない。臆病者には余計な心配もない[15].

彼は自分が絶対に借金しなかったばかりでなく、家族はもちろん周囲の親しい人々すべてに固く借金をいましめていたというが、それはなぜか。言うまでもなく、独立を維持し、自由に生きるためである。内村鑑三はその著『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』の中で、「心の隷属は最

も危険な隷属ではないが、胃の腑の隷属は最も危険なものなのだ」[16]と言っているが、長谷川が借金をしなかったのもこれと全く同じ精神で、「自由独立、神を知ること、凡てを神に任せて世渡りをすること、これに越した天福はない」[17]という、この天福を守るためであったのである。

独立とは、文字通り神にのみより頼んで独り立つことである。長谷川は独りで事業を起こし、独りで事業を経営し、独りで事業の責任を負った。内村の言う「単独の勢力」[18]であった。その内村の「単独の快楽」という揮毫の文字を解説して、彼はこう言っている。

> 単独とは一人のことで心が一番と合う。責任は自分一身にあり、何物にも掣肘を受けず、束縛されず、やるもやらぬも自由勝手、男性的である。悪いと気附いたときは九合五勺から引返しても誰に遠慮は要らぬのである。独り静かに神に祷り、教えられ、独り真理と共に立ち、独り良心と偕に眠り、独り聖業にたづさわり得て希望は躍る。平凡の労役と雖も之れあってすべて聖業と化す。思いは無限の天空をかけり、神恩はヒシヒシと身に味わう。勇者は一人立つ時最も強しとかや、我等の一挙手一投足はいかに小なりと雖も直に地軸に達するが如き心地す[19]。

4．人となり

ところで、ビジネスマン長谷川の暮しぶりはどんなものであったか。ここにこんな証言がある。

> 世の常の人ならば、一応奮闘努力に依って財を得、先ず自分の家族の者に金銭のかかった生活をさせ、これを以て自分の努力の成果を満足する人が大部分でしょう。けれどもお父様もお母様も（長谷川夫妻のこと―筆者）、御自分の御生活は何時も御質素でしたが、他人を幸福にするためには御自分の財を惜しみなくお使いになりました。いつもきちんとしてはいましたが、粗衣をまとって居られました。その粗衣の中から美しいお心や暖かい御心がちらちらとのぞいて、えも言われぬ尊さを感じました。（宮地敬子[20]）

自分の勤労の実を、自分のためでなく、他人の喜びのために使ったところに、ピューリタン的厳格に徹しながらも、長谷川の人生に温かいふくらみが感じられるゆえんがあった。

長谷川を知る人は、人間長谷川周治を一と口になつかしい人と呼ぶことに異論はないだろう。そしてこのなつかしさは、何と言っても彼の「温かな人柄」（品川力[21]）と、そのやさしさに負うものである。『手記』には長谷川の、母や妻をはじめ、その生涯に出会った二、三の婦人たちに対する深い愛の言葉が記されているが、彼は確かに「前垂れがけの武士」（山本泰次郎[22]）であるとともに、「優にやさしい女びとのごとき」（品川力[21]）人であった。男らしい強靭な精神と、女

のような繊細な心とを合わせもった人であった。

やさしい長谷川はまた、慎みの人であった。彼は若い時から恥ずかしがり屋であった。山形中学時代のことを語って「『長谷川、百点』といわれた時にはいつも面を隠したものであった」[23]と言い、自分を評して「いと小胆なる恥ずかし屋の青年」[24]であったと言っている。この恥ずかしがりが、恐らく長谷川に良いことを淡々とさせてしまったのであろう。特に次項に述べる平和のための働きにおいてそうであるのだが、彼は外から見れば驚くような大事をするに当たっても、決して気張るところがなかった。為すべきことを為すのは当然である、すべきことをしないではいられない、ただそれだけで実に素朴に、淡々と、大切な良いことをしてしまっているのである。しかも本人にとっては、良いことをするというのはとても恥ずかしい、だから右の手のすることは左の手にも知らせない、いや知らせることができないのである。長谷川の慎みぶかさは、何よりもこうしたところにあらわれていた。

もう一つ恥ずかしがりと言えは、こんな事が『手記』に記されている。柏木の内村の向かいに住んでいたころ、長谷川は内村の著作を耽読していたにもかかわらず、それを

> 直ぐお向いの研究社から取るのは何だか恥ずかしくて、柏木の書店山岸壬吾商店から購入していた。又、内村先生の集会などにも出席せず、書籍によって慰めを得ていたのであった。時々内村鑑三先生と逢って、心で黙礼したりしたものであった[25]。

というのである。これは見方によっては、彼は偏屈で傲慢な人だと映るかも知れない。しかし、先生を尊敬しているから何としてでも集会に出たいと思う人もあるだろうが、長谷川は反対に、先生を心から尊敬していたからこそ、なおさらそれが出来なかったのである。これも彼の慎みの一つのあらわれであった。

慎みとはまた、当然のことながら謙虚ということである。先に述べたように長谷川は決して借金をしなかったが、その彼が「病中手記」の中でこう詠んでいる。

> 人皆を騒がせしよな我故に　恩借の山酬ゆるに術なし[26]

この歌は私に「誰に対しても何ものをも負うな、互に愛しあうことを別にしては」（ローマ13・8、私訳）と言ったパウロを思い起こさせる。神にのみ頼って独立自由の生涯を全うした長谷川は、また愛の負債だけは決して返すことができないことを知る、真の謙虚の人であった。

長谷川という人は人間として極めて魅力のある人であったから、人間長谷川を語ればきりがない。さいごに彼の人生観を示す一節を紹介して、次の項に進むことにする。

患難汝を玉にす。世の実生活はそんなにあまいものではない。不自由を常と思えば不足なしである。そして荷を軽くして自由独立、男らしい一生を送らねばならない。

男子は、会社や銀行や役所などで、只之れ命に従うのみで安全めざして生きるべきではない。人各各定められた歩むべきの道がある。生きている人間が独立独歩、勇往邁進する時に於て、当然種々の困難が襲い来る。進んで患難に会い、練達を経て希望、勝利の生涯に達しなければならない[27]。

Ⅲ 長谷川周治の平和主義と交友

1. 平和主義の友たち

長谷川周治を語る時に、彼が戦時中いかに平和のために尽くしたかに言及しないわけにはいかない。そしてその働きは、長谷川の人物と生涯の大きな特徴の一つである、その広く深い交友と固く結びついていた。彼の平和主義は、その交友の中で美しく開花したと言ってよいであろう。ここでは主として長谷川と平和の為の戦いを共にした人たちの証言を通して、平和主義者としての長谷川周治を浮き彫りにしてみよう。

長谷川が永眠した時、独立伝道者政池仁はその『聖書の日本』誌に「弱者の友長谷川周治氏を憶う」[28]という一文を書いている。政池は長谷川を最もよく知る人のひとりで、この一文は平和主義者としての長谷川のすべてを語っていると言ってよい。まず政池が自分と長谷川との関係を語っている部分を引用する。

戦時中、私の貯えもなくなり、更に『基督教平和論』を出したため人々から白い眼で見られて、生活は行きづまる、先輩からはあの本をたたかれる、誰も慰めてくれる人はいないという時、私と妻とは、内村先生の「最後の一円まで」を読んで、餓死を覚悟していたのである。その時、「基督教平和論を読んだ」と言って訪ねて来られたのが長谷川さんであった。その本は確か故中野慶次郎氏から教えられて読まれたとの事であった。私と長谷川さんの交際はこうして始った。私はよく人々から「あなたは戦時中どうして暮したのですか」ときかれるので「からすが肉とパンを持って来てくれたんです」と答えるが、そのからすというか、ザレプタのやもめというかは、実は長谷川さんだったのである。長谷川さんも、あの頃は決して楽ではなかった。職人二十名ばかりのゴム引氷嚢工場を持っておられたが、原料難と応召で職人も段々少なくなって、工場が動かぬ日が多くなっていた。ある日私の所に来られて、「軍隊で使用する毒ガス服（体全体を包む）の注文が来ました。これを作れば原料も貰える

し、もうけも大きいのですが、軍需品は一切断ろうと思います。実はこれを断ると軍部からにらまれて、あと絶対に原料を手に入れることができなくなるかも知れませんが、やむを得ません」と言われた。私も「そうなさい。エホバ・エレです。ともかく生きられるだけ生きて一緒に死にましょう」と言った。それで工場は閉鎖されていた。杉並区堀ノ内にあったその工場には、長谷川さんが「平和舎」と名づけて、庭に二尺位の白い三角の塔のようなものを立てて、平和の塔と言っておられた。平和という語は、その当時全くタブーであったのであるが、長谷川さんは、わざとそういう名前をつけられた。

『基督教平和論』の再版は向山堂が恐わがって出してくれぬので、長谷川さんが費用を出して下され「聖書の日本社」から出たが、すぐ発売禁止、続いて起訴、簡易裁判で罰金となった。私には罰金を払う力はなかったので一部は長谷川さんが、残りは友人たち（多くは病人）が聞き伝えて寄附して下さった。

ある日突然二人の憲兵が来て私は憲兵隊に連行された。それでもその日の夜中の十二時頃釈放されて帰宅したが、私を迎えた妻は、先程長谷川さんが来られて、「私も憲兵隊に連行されて、政池先生の事を沢山きかれたので、先生もここに来て居られるのですかと聞いたら、そんな事はないと言いましたが、きっと連れて行かれたに違いないと思って釈放されたこの足ですぐ参りました」と言って帰られた、と言った。私より一時間ばかり先に釈放されたのであった。翌日長谷川さんとあった時、私は憲兵隊から出て市電の無くなった道を澄みきった月に照らされて新宿駅まで一人で歩いた時、「主と平和をいなまなくてよかった、と感じた」と言ったら、「私もそうでした」と言われて、二人して感謝の祈りを捧げたことであった。

次に掲げるのは、金沢常雄の長谷川の思い出である。

老兄がいかに平和を愛されたかということに就て、私が特に思い出す事は太平洋戦争開始の時のことである。私は昭和十六年十二月八日朝、偶々氏を堀之内宅にお訪ねして、時世を憂いて語り合っていた。その時ラジオによって米国に対する宣戦の知らせが東条首相の「御稜威のもと……」という重々しい口調で放送された。これを聞いて老兄も私も、かねて予期したものの実に沈痛な思いに沈んで、暫く黙した後共に祈った。氏も私も思わず熱き涙を以て頬をぬらしたのであった。そのあとで、共に神の審きの祖国に臨む日を想見して悲しみ、且つ一日も早く平和の回復せんことを願ったのであった。氏は実にキリストによる真の平和の愛好者であった[29]。

また『求道』誌の主筆藤沢武義は、「追慕」と題する一文に次のように書いている。

不肖も主に在って聊か平和と正義を唱え、右の事件（後述する鈴木・渡部事件－筆者）より半年程前であったか、当局の忌諱に触れ一寸入牢の美味を嘗めたのに対し長谷川さんは主の愛を以って愛し下され、事件解決後もう一度聖書勉強のために上京するに当り、前記の御家（川崎市中野島の別宅）を無家賃で入ってくれと自発的申出あり（エホバエレ）、強ってお願いして月一円か二円取って頂いて居住させて頂き有難い極みでありました[30]。

次は矢内原忠雄であるが、『矢内原忠雄全集』第２９巻（書簡篇）を見ると、１０数通にのぼる長谷川あての手紙が収録されている[31]。これらの手紙から、後述する『内村先生御遺墨帖』などの刊行にあたって、矢内原がいろいろと長谷川に貴重な助言をしていること、一方長谷川は戦時下の困難な状況の中で真理の為に戦う矢内原を、物心両面で一所懸命に応援しているさまが窺えるのである。

内村と肝胆あい照らす仲であり、戦時中は高崎で伝道していた住谷天来との、長谷川の交友については、政池が先の一文の中で次のように言っている。

住谷天来氏も戦時中よく非戦主義を守り通された。その頃は群馬県の高崎に住んで居られたが、雑誌「聖化」にあまりにもツケツケと平和主義を書いて政府と軍部を攻撃したので、早く発行停止を喰った。あまつさえ、夫人が長の病床にあられた。長谷川さんは、この老先生をも助けに度々高崎に行かれた。そして住谷先生の漢詩を集めた『黙庵詩鈔』という立派な書物を出版された[28]。

次に特筆すべきものとして、アメリカ人宣教師エステル・バーワとアンナ・パフとの交友がある。これについては長谷川自身が、戦後の１９４８年（昭和２３年）１２月、国立国会図書館調査立法考査局長の問合わせに対する回答として書いたものがあるので、そこから関係部分を引用する。

米人宣教師エステル・バーワ、アンナ・パフの両人は小生と永年親交を結び来り候者に有之、信仰上全く家族の如く親しみ往来致居候ものに候。昭和十六年十二月両人は我国政府の命により帰国の途に上り候え共、日米戦開始を理由に海上より引返されて横浜に監禁の身となり続いて東京杉並区高円寺の一家屋に移され、杉並警察高等課の厳重なる監視に会い候ことなど有之、出来事の都度小生引出され、拙宅家族一同聊か尽す所有之候。抑留中毎月金品の若干を差入れ荷物の保管整理等の斡旋致候こと等に候。両人は多くの米人と共に其後世田谷区調布のスミレ女学院建物内に収容の身と相成交換船によって帰還を許される迄数ヶ月を此処に過され候其間長女静枝が使いして、辛うじて警視庁の許可を得時々野菜果物等の差入

を致し一同の喜ぶ態を見て何よりの楽しみ何よりの慰めと神に感謝致候ものに候。

交換の船は出でて印度にて我国人と交代の際日本赤十字社員に記念の品を托して感謝の意と無事乗船を報せられしこともあり、彼等が日本在留中我らが彼らに為せし少許の好意を過大に感受せられて、帰国後はそれがため当時在米中の愚息の身を案じつつ多くの保護と援助と奨励を与えくれ、米国各地の講演談話等に於て只の一回だに日本人の悪口を述べしことなしとのこと本人並に周囲の人達より聞き、実に此意外なる言に接し、幾度か神に感謝の祈を捧げ候ものに御座候[32]。

戦時中、良心的兵役拒否を憲兵隊に自首して出たため監禁され、暴行を受けたイシガ・オサムは、その時のことを次のように回想している。

わたしがノリメ・タンゲーレとも言うべき孤立無援の状態にあったときに、一面の識もなかったわたしの身を案じて東京から福岡まで赴き、驚愕と絶望にひしがれていた老父に平和の意義を説いてわたしの為に弁じて下さり、家族をはげまして下さいましたことは、わたしどもにとって終生忘れえぬ感謝のまとであります。「それまで父は死んだもののようであったが、長谷川様のお慰めのお言葉によってようやく生き返った思いであった」と、先頃亡くなった祖母が幾度かわたしに話して聞かせてくれたことでした。ほんとにこのときの長谷川様はわが家にとって天の使でありました。

長谷川様にお目にかかったのは前後ただ一度、昭和十八年十二月にわたしがしばらくの留置生活から許され家に帰るまでの数日を、そのお宅に引きとって傷を包むごとくにいたわって下さったあのときのことでした。平和のために死ぬべき身をおめおめと生きながらえて出て来た敗残のみじめさの中にあったわたしを忌むところなく迎えて下さったあの中野島と堀の内のお宅の「平和」。平和舎に満ちるこの主にある平安をその前とあとに幾多の方がお受けになったことかと思います[33]。

最後に鈴木弼美と渡部弥一郎との関係について、もう一度政池の証言を聞こう。

鈴木弼美と渡部弥一郎兄が平和主義のため山形の警察に入れられた時、弼美の妻である私の妹から、今度見舞に来て下さると、かえって村の者や警察を刺激して危険ですから、来ないで下さいと言って来た。しかし長谷川さんは、私がとめるのもきかず、すぐその晩出発して、山形の警察に行って鈴木と渡部兄に面会し、又、津川村まで行って彼らの家族を慰めて下さった。私はひと月ばかりして人心の鎮った頃を見はからって津川村に行き、翌日、朝三時に妹と共に出発して、彼女が差入れに行くのについて行った。真暗い夜道を二里ばかり歩

いて駅まで行った時の事は今も忘れられない。長谷川さんは二人に面会したというが、吾々はどうしても面会を許されなかった。長谷川さんは余程強引に、がんばって頼み込んだものと見える。その後も、長谷川さんは度々津川村を訪ねて、八カ月後に彼らが出て来るまで、彼らの家族らを慰められた[28]。

２．長谷川の平和主義

以上は戦時中長谷川と平和主義によって結ばれた人々の、彼についての追憶のごく一部であるが、これだけでも平和主義者としての長谷川の姿は十分過ぎるほど十分に明らかになったと思う。

そこに描き出された長谷川は平和主義者と呼ぶには余りに裕　かな平和の人である。内村の非戦論に「戦時における非戦主義者の態度」[34]という一文があるが、戦時下の長谷川はまさにその実践者であった。彼は平和のために迫害されている人を見て「痛心に堪えず」[32]、どこまでも静かに、どこまでも慎みぶかく、そうした人たちを慰め励まし、彼らを物心両面において力強く支えた。そして自らもまた必要とあれば、正々堂々と「理非曲直を弁明し」[32]、毅然として非戦平和を主張したのである。それは一に、長谷川の中にキリストの平和が深く確かに宿っていたからであって、彼にとって平和主義は、主義でも運動でもなくして、実に信仰そのもののことであったのである。そのことは先にも引いた国会図書館への回答書の中で、彼自身が次のようにはっきりと表明している。

> 小生は基督教の何宗派何教会にも属せざる一の平信徒に御座候。若年にして信仰に入りしが中年内村先生の著書に接し且つ導きによりキリストの純福音を知り、教会の仲介を経ずして直接神の御恩恵に浴し基督者としての資格のあることを発見、以後苦難の中にも悦んで感謝の生活を送り居るものに有之候。随て自由と独立と平和とは自らなる信条と相成戦時中となりては非戦を唱うるのやむなきに至り候次第に御座候。昭和十三、四年の交（ママ）日支事変以来の数々の凄惨不義極まる情報をきくや而して益々拡大侵略の度を進め日米開戦にも及ばんとする形勢に接するや戦争を阻止せんとする一念やみ難く、只一介の工場人として何の資格なき者なるも決然身を挺し私財を擲って左の数種の書籍を刊行し、杉並区堀之内にありし私宅を平和舎と命名して内地及び朝鮮、満州、台湾に居住する真実なる同信の友に配布贈呈以て聊かにても戦争意識のブレーキたらんことを期し、基督者の奮起世論の喚起に相努め候次第に候。（中略。「左の数種の書籍」の説明がある一筆者）
>
> 尚近隣、諸集会、友人との文通の際も折々には戦争の非なることと、戦争は世界に信用を失墜し禍することの莫大なることと、遂には日本を滅亡の深淵に陥るべきものなること、戦争は天皇陛下の御意志に非ずして軍部の煽動に基くものなること、陛下は平和愛好の君にてあられる事など昂奮にかられてはっきりと口外致候為一部の人達に国家を毒する非戦論者と

見做され、之等のこと憲兵隊の知るところと相成昭和十八年十九年の間数回に亘り憲兵の取調を受け、十九年六月遂に東京牛込区若松町の憲兵隊に拘引せられ候。其際家宅の捜索を受け来信書籍筆記等の取調の上持行かれ候得共所信を率直に申出で候為か差程のことなくして、戦激甚の際士気を喪失する大なれば再びせざる様との仕末書を無理に書かされて深更帰宅を許され候ことも有之候。

戦争中における基督者として為さねばならぬ責務の大なることを痛感しながら、己が家業の忙しさと周囲の事柄に心捕われ甚だ不徹底に終始致候事真に慚愧の至りに存居候[32]。

ここで長谷川の平和思想の、いわば預言的一面を示すエピソードを一つ紹介しておこう。これまた政池の語るところである。

台湾の人で王英忠君という人が滞京していた。今は台南にいる。どこかで王君と長谷川さんと私と　三人で話しあっていた時、「日本人は今いばっているが、今に私たちが王君たちの前に頭を下げて謝らねばならぬ時が来るのですね」と長谷川さんは言われた。王君はきまり悪そうにして、「そんな事はありませんよ。とても親切にして貰っているんですもの」と言った。その他の台湾の諸君にも、いつも親切であり、又、彼らを尊敬しておられた[28]。

3.　長谷川の交友

すでに見てきたように、長谷川は平和のために戦っている人たち、特にその為に不都合を蒙り、苦しんでいる人たちを黙って見ていることができなかった。そういう人たちを彼は彼らしい細やかな、実質的なやり方で助けた。それが彼の平和主義の実践であった。そしてこの平和のための働きを通して、長谷川の交友は広がっていったのである。

その友垣の中には、バーワ、パフのような当時の敵国人もいたし、王英忠のような当時の日本の植民地の人たちもいた。長谷川の生涯を彩るこの広い交友 ── 迫害される人、差別される人、さらには敵国の人までをも包みこんでしまった彼の交友の秘密は、いったいどこにあったのであろうか。二人のひとの証言を聞こう。

長谷川様には生涯忘れることの出来ない御恩になりました。戦前の昭和十六年のころ、わたしは信仰の故に親しい友だちからわかれ、いや棄てられたのですが、その時親身になってお助けくださったのは長谷川様でした。その後投獄されて獄中で危篤になりました時も、終戦後病床にありましたときも、どんなにか慰めはげまし、また「物を送ってわたしの欠乏を補って」くださったことでしょう。わたしは長谷川様とその主義に於ては必ずしも同じでは

ありませんが、同じ主イエス・キリストの御血潮にあがなわれた者として、わたしのような者を心から愛してくださったことを感謝します。（山中為三、牧師[35]）

その間折りに触れ時に臨んでの激励、慰藉、真情溢るる御同情を頂いた事を、どれだけ有難く勿体なく感じていた事でしょう。他へは洩らしたくない苦衷や苦悩も貴下にだけは心置きなく訴え得らるる私であり、また時としては私ごときにこんな事までと思われる様な打明け話も伺い、その為祈りを求めて下さいました。素より凡ての点において、貴下の友としては価値なき私ながら、お互い「たましい」と「たましい」の奇しき触れ合いを感じないでは居られません。（西木栄治郎[36]）

これらのことばがよく語っているように、長谷川の交友は一方では主義をも超える広い、包容的なものであったと共に、他方その友情はたましいとたましいの触れ合いにまで至る深い、あたたかいものであった。それはまた、外見にはどんな人にも自分の方から手をさしのべるという広さをもちながら、内面的には人を見る眼がなかなか厳しく、自分の納得した人でなければ容易につきあわないという狭さを持っていた。それだけに一度つきあい始めると、実に深い、長い交友が成立したのである。ここに長谷川の交友の秘密があった。

もう一つ長谷川の交友には次のような特質があった。彼は確かに正義と平和のために戦う人たちを支えたが、同時にこの世の不器用者とでも言うか、一所懸命に生きているのだがうまく生きられない、一所懸命生きようとすればする程失敗して苦しまなければならないような人、イエスの言われた「踏みつけられて、じっと我慢している人たち」（マタイ５・５、塚本訳）をよく助けた。長谷川の工場には、いつもそうした人たちが働いていた。その中には、関東大震災の折助けを求めてきた朝鮮人もあった[37]。　彼自身は決して不器用な人ではなかったが、そういう人を見ると黙っていることができず、すぐにでも飛んで行って、自分の方から気を利かせて何かをするというふうであった。長谷川の内村を評した言葉に「其聖侠主義的態度うんぬん」[38]というのがあるが、彼自らまことに聖なる義侠心に生きた人であった。

こうして、平和の象徴である「白鳩」をマークとした「平和舎」の舎主であり、「鳩の家」の主人であった長谷川の平和主義は、人と人との間に「平和をつくり出していく」（マタイ５・９）彼の広く、深い交友の中で美しく花開いたのである。

Ⅳ　長谷川周治の信仰と思想

１．出版事業

長谷川の生涯の事業は、もちろん「ゴムの仕事」であった。しかし彼にはもう一つ大きな事業があった。それは本の出版で、そこには彼の財産とともに、彼の信仰と精神とが注ぎこまれていたと言ってよい。「病中手記」に、「我が生涯の喜悦」の一つとして「出版物は名利を除外して、全身全力を傾注し得たこと」[39]とあるが、この言葉からも長谷川がどんな考えで本の出版をしたかが窺えるであろう。

戦時下次第にゴムの仕事が不自由になってきた時、長谷川はそれまでに蓄えた私財をなげうって出版を始めた。それによって、彼はいかにも実業人らしく、自ら非戦平和を主張すると共に、平和のために戦う友人たちを助けたのである。

１９４１年から４２年（昭和１６年から１７年）にかけて、『内村鑑三先生御遺墨帖』をはじめとする一連の本（参考事項中の「平和舎刊行図書」を参照）の出版ののち、敗戦をはさんで１０年後の、１９５２年（昭和２７年）に長谷川は平和舎の出版事業を再開し、結局病気で倒れるまでこの仕事にすべてを傾注した。ただ出版した本の選択や、出版の仕方などを考えてみると、彼の出版は決して事業と呼べるようなものではなかったと言わざるを得ない。では何であったかと言うと、一つには、出版は長谷川にとって、自分の内に溢れるものの表出以外の何ものでもなかったのである。『アラム語聖書の研究』の「序」に彼はこう言っている。

> 以上のように（アラム語聖書を研究するに至った経緯を言う－筆者）、さまざまと考えつめた結果、ここに私は身の程もかえりみず、これが出版を敢てせざるを得ぬこころになった次第である[40]。

第二に、出版もまた彼にとっては交友であった。『御遺墨帖』がある意味で藤沢音吉を助けるためであったことは、その最後の１３点がすべて音吉あての内村の手紙であることをもっても明らかだし、『アラム語聖書』は「二十年もの長い間、これが研究のために、あらゆる窮乏に甘んじ、苦心惨憺、今日に至られた」[40] 益本重雄に対する義侠心、また『カーライル』は住谷天来に対する長谷川一流の義理堅さによるものであることは、これまた明らかであろう。ここに彼の出版事業の貴さと同時にその限界もあったと言える。

２．晩年と死

長谷川は妻いし子を１９５４年（昭和２９年）１０月２９日に失った。彼が不自由な片目で、カーライルの『偉人英雄の精神』に託して、自らの信じるところを文字通り一字一字鉄筆をもって彫りつけている最中のことであった。それが彼にとってどんなに大きな衝撃であったかは、その第一

巻の「序文」の最後に記された次の言葉によく表われている。

誠実温良にして、而かも常に万難を排して、よく此の我を助け励ましてくれしこと実に四十年、今は亡き老妻の俤を偲びつつ、只一人茅屋に筆をとり、此の序文をつづれり[41]。

そして長谷川はその翌年の秋、いし子の永眠からちょうど２年後に、彼女と同じ病気で彼女を追うかのように天に召されていった。胃の不調を訴えたのは初夏のころであったが、それから永眠までの約半歳の間に病床でものされたのが『偽らざるの手記』である。あとはこれに基づいて彼の信仰と思想について述べたいと思うが、その前にそれを考えるための手がかりとして、長谷川永眠の折、独立伝道者山本泰次郎がその月刊誌『聖書講義』に載せた「死の準備」[42]という一文を紹介したい。

さき頃なくなられた長谷川周治さんの遺稿などを読む機会を与えられ、いろいろ読んでいるうちに、フト「私は今は平和の事に興味を失って、死の準備をせねばなりません」という一句に注意をひかれた。これは戦後二年頃に、長谷川さんが政池仁君へおくった手紙の一節だそうであるが（「聖書の日本」第二四六号一四頁）、わたしは、これこそ長谷川さんの晩年のなぞを解くかぎだと思った。

周知のように、長谷川さんは熱烈な平和主義者で、身をもって平和主義を実行した人であった。軍需品は造らない、と自分の経営する大切なゴム工場を手ばなしてしまった。平和論のために迫害される内・外人を、全力をあげて援け、励ました。そのため自身が軍部から圧迫されて危険な立場に立つことさえあった。長谷川さんの告別式に、遠く関西からわざわざかけつけて来た婦人宣教師があったが、これは戦時中長谷川さんから援けを受けた多くの宣教師の一人だった。平和主義者長谷川周治の名は、永く日本の平和運動史にのこるだろう。

しかし長谷川さんは、戦後はもう平和運動には加わらなかった。平和問題はもはや、長谷川さんの第一の問題ではなくなっていた。（中略）

こうして長谷川さんは、カーライルに自分の知己を発見し、カーライルの誠実の福音と労働の福音に最後の喜びと平安とを得て、「生涯の思い出はカーライルを訳したことだ」と述懐しながら天国へ凱旋したのである。

わたしは長谷川さんがどうしてこのような晩年を送ったのか、ふしぎでならなかった。しかし今度、死の十年前に「死の準備をせねばなりません」と言われたと知って、始めてすべてが氷解した。わたしは厳粛の感に打たれると共に、長谷川さんに対する尊敬を新しくした。長谷川さんは死の準備に十年をささげたのである。長谷川さんは平和論では死ねないことを知っていたのである。そして平和論に代って、いな、平和論を忘れて、死ぬことのできる福

音をさがし求め、それを得て、そのために生命をかけて働いたのである。実にえらい人であった。長谷川さんは死の準備の必要と、人は平和論位で死ぬことはできないという大きな真理とを死を以て証明したのである。

これは晩年の長谷川にとって、まさに知己の一文である。「熱烈な平和主義者で、身をもって平和主義を実行した人であった」彼が、「戦後はもう平和運動に加わらなかった」のはなぜか。一つには、長谷川一流の慎みということがあったろう。戦争中平和が失われた時であったからこそ、長谷川は熱烈に平和を高唱した。しかし、とにも角にも平和が訪れたいま、しかも祖国が戦いに敗れて平和が回復された時に、どうして勝ち誇ったように平和を説くことができようか。彼の心の中に、そうした気持があったであろうことは疑いない。と共に、ひとりの誇り高い日本人として、自分が主張し、自分が予見せざるを得なかった祖国の滅亡を、この目で見なければならなかったという深い悲しみが、晩年の長谷川の生活全体を貫いていたように思われてならないのである。

しかし、これだけでは長谷川が「平和の事に興味を失った」ことの説明にはならない。彼には「平和問題はもはや第一の問題ではなくなってしまった」理由があった。それは「死の準備」のためであった。死の準備のために、もはや平和の問題にかかずらっている余裕はなかったのである。山本が言うように、長谷川は「平和論に代わって、いな、平和論を忘れて、死ぬことのできる福音をさがし求め、それを得て、そのために生命をかけて働いた」のであった。

晩年の長谷川に会った人は一様に、そのやさしさと共に、彼のかたくななまでの孤独への徹底と、異様なまでの内省的態度とに印象づけられた。それは戦中、平和のために雄々しく戦った長谷川のイメージとは、余りにちがうという気がしないでもない。しかしこれは長谷川の二面を示すというより、むしろ「死ぬことのできる福音をさがし求める」晩年の長谷川の求道が、いかに真摯熱烈なものであったかを物語るものではなかろうか。

山本の言う通り、人は平和論くらいで死ねるものではない。しかし神との平和なくして人は平安に死ぬことはできない。そもそも長谷川は平和主義者というより、平和を追い求める人であった。そして言うまでもなく、聖書は人の内心に臨む平安と、人と人との間に成就される平和とを区別しない。ゆえに長谷川の場合も、戦時中志を同じくする人々と共に平和のために戦ったことと、戦後世上に行われる「平和の事」すなわち平和主義とか平和運動などには興味を失い、ひたすら内なる平和を求めて死の準備をしたこととは、実に決して二つの別なことではなく、全く同じ一つのことであったのである。彼は言う。

父は此の際ことごとく己が罪を聖前に懺悔して、浄い真っ白な心に洗われて本当の平安を得たい。これまでも主にありて平安を得ていると信じているのだが、幾度も此の事を繰返して神の無尽なる御愛にひたりたい[43]。

神は長谷川のこの切なる祈りに応えられて、晩年の１０年を死の準備にささげた彼を、激しい病苦の中にもかかわらず平和にお召しになった。１９５６年（昭和３１年）１０月２４日、満７２年の生涯であった。

３．長谷川の信仰

長谷川の信仰を考えるために、『手記』の中から彼とキリスト教との関係を示すような記事を拾って読んでみると、二つの点に気付かされる。

長谷川が初めてキリスト教に触れたのは、十代の後半丸見屋で働いていた時、商家の子弟の教育のために催された講演会で海老名弾正や新渡戸稲造の話を聞いたことであった。その後２０歳代前半、半田商店に勤務していたころ「救世軍に夢中になって」[44]、神田三河町の救世軍労働ホームに入って働こうとまで思った。さらに３０歳になろうとするころと思われるが、芝のバプテスト教会で洗礼も受けている[44]。そして、いし子と結婚したころには「内村先生の『聖書之研究』に接して求道心抑えがたく、未明柏木に衷情を訴えに行った」[46]ということもあった。その後内村家の向かいの家に引越すと、その２階で「聖書の研究や、基督信徒の慰め、求安録、愛吟や興国史談などを耽読したのであった」[47]。内村に対する傾倒は以後生涯つづき、『御遺墨帖』の刊行にまで至るのだが、すでに述べたように、ついに内村の集会に出席することはなかった。

ところが長谷川は堀之内の家が建ち、ゴム事業も順調に伸展し、中野島に果樹園を作って生活にゆとりができたころから、ずっと一家を挙げてキリスト教の集会に通っている。始めは畔上賢造の集会、のちには基督心宗の原田美実の集会であった。これらの集会における心温まる交友のかずかずが、『手記』の中にいきいきと語られている[48]。そして最後に、長谷川は亡くなる年の夏東京聖母病院に入院して、はじめてカトリック教会にも接した。性来感激屋の彼は、この病院の修道女たちの献身的な看護ぶりに非常に打たれたらしく、「異端ぞと思いこみにし天主の教　今はまこととめざめけるかな」[49]とまで詠んでいる。

こうして読んでくると、人はあるいは思うかも知れない。いったい長谷川という人はどんな信仰の人だったのかと。救世軍に夢中になり、バプテスト教会で洗礼を受け、内村に傾倒したかと思うと、のちには基督心宗の教会に出席し、最後の病床ではカトリックにも感服している。矛盾と言えば矛盾、大きな矛盾と言うべきだろう。

このことに合わせてもう一つ気付くことは、この『手記』の中に長谷川の回心の記事がないということである。これまた不思議と言えば、ずいぶん不思議なことである。ふつうキリスト信者がこれだけの手記を書けば、たいていはいわゆる回心、すなわち自分はいつどういうことがあって神を信じるようになったかとか、自分はこうしてキリストに出会ったとかいう類のことを書くものだが、

長谷川の『偽らざるの手記』にはそうしたことが一切書かれていないのである。

これは一つには、長谷川にたとえそうした体験があったとしても、すでに繰り返し述べたような彼の慎みぶかい性格からして、それを文字にして公にするようなことはできなかったということも考えられよう。しかし私にはむしろ、彼には事実そうした種類の信仰体験はなかったのではないかと思われる。長谷川の信仰の性質から言ってそうであるように思われるのである。

それでは長谷川の信仰はどんな性質の信仰であったか。それは何よりもパウロの言う「愛によって働く信仰」（ガラテア５・６）であった。聖母病院での経験に関連して、彼はこう言っている。

> 信仰は結局実行にある。愛隣の伴わざる信仰は虚である。信仰は道程であって仁慈は主体であろう。神は愛なり。愛なき者は神を知らず。義と信仰とを主体とする者は反省の必要がある。犠牲奉仕の精神は人心をして奮い立たせ、天に向って直進させるのだと思う。清貧、貞潔、従順、身も魂も主に捧げ、み旨のままに生きよ。死生は主の縄張りのうちにある[50]。

長谷川がどこまでも実行の信仰を求めてやまなかったという点に着目すると、一見いかにも不統一に見える彼のキリスト教遍歴も、はっきりした焦点を結んでくる。彼はただ単純に、素朴に、真実に「愛と犠牲と奉仕の精神」の息づくところを追い求め、一と度ここぞと思い決めるところを見出すと、実に率直に、誠実に、そして広やかにそれを自分のうちに受け容れ、また自分をそこに投入した。それゆえ彼にとっては、そのところがたまたまどんな宗派であろうと、そんなことはどうでもよいことであったのだろう。その交友が多彩で広くあったように、長谷川の信仰もまた広々と大らかなものであった。この点について次のイシガ・オサムの文章をぜひ紹介しておきたい。

> 戦後になって特に無教会がキリスト教会（ママ）にあって大きな地歩を占めて来たとき、あの党派的なことをいとわれた内村先生の信仰態度は、おのずから長谷川様のお立場、またその御日常に具現されたように思われてなりません。無教会が無教会的勢力として固まることはたやすいことです。しかしそれはむしろ危険なことです。無教会の精神は地の塩としてその社会にとけこむことによってこれに味付け、これを腐敗から防ぐときに、最もそのいのちを発揮するのではありますまいか。長谷川様晩年の歩みは、この意味において、内村先生の最も重んぜられた独立と愛とをあかしするもののように想像されます。わたしは多くの書物を通して無教会の信仰について学びました。しかし無教会の愛について、愛として働く信仰については、長谷川様に学ぶところが最も多くあった一人であります[51]。

しかしここで念の為め言っておかねばならないことは、それでは長谷川の信仰は広くばかりあって無定見であったかというと、決してそうではないということである。彼の交友が広くありながら、

よく選ばれたものであったように、長谷川は信仰のことについても、しっかりした目でよくそれぞれの教えの本質を洞察し、批判すべきものは批判している。たとえば前記の基督心宗に対しても、

> 私はキリストを信じ、彼の愛の深さに感激して少しでも彼にならう者となり、十字架の苦を味いたいと念じている者である。そしてキリストの御救いの御愛を知るにまだまだ不徹底で、此の点残念に思っているのである。キリスト我が裡に在させ給う、いつもともに在し給う、これを不徹底ながら信じ通して、歓びと希望とに生きぬこうと思っているのである。そして最早老境に入り時の余裕がないので、孔孟の道や釈迦の教えは頭に入らない。ただキリストの真理に生きたい、死にたいと思っている[52]。

とさり気なくこれを退けて、その正統的信仰を明確に表白しているのである。

「愛によって働く信仰」とは、別な言い方をすれば、教義の信仰でなく事実の信仰ということであろう。長谷川にいわゆる宗教体験としての回心が無いのも、私にはむしろ当然のように思われる。彼のような人には、これが信仰であると信仰だけを生活の中から取り出して示し得るような、そういう信仰はないのである。なぜなら長谷川のような人にとっては、信仰は人生の事実そのものであり、その信仰はすべて、内村が「真理は頭からでなく、手から入るものだ」と言ったというが、まさに額に汗しつつ自分の手で働くことによって与えられていったものだからである。彼がカーライルの「労働の福音」に共鳴したのもゆえなしとしない。こういう人の信仰は、ただその信仰がその人の全生涯を通して描き出した信仰の軌跡からのみ、よくこれを知ることができる。そこに事実の信仰に生きる人の、人間としての独自性もあるのであろう。実際、いまこうして長谷川という人物を見ると、福音がいかに人間を最もその人らしくするものか、という感嘆を抑えることができない。

この信仰の軌跡から見て、長谷川の信仰は一見型破りのように見えながら、実は極めて正統的で敬虔な信仰であったと言うべきである。それは『御遺墨帖』をはじめとする刊行書の序文や解説などにもよく示されているが、ここでは『手記』の中から次の２節を引くにとどめたい。

> 此の世はないもの、神こそ永遠の存在で、有りて有る者である。神とはイエス・キリストのことである。天地万物を造り給い、之を保存し今もたゆまず運営し給う神は、歴史的なる、今も生きていらっしゃるイエス・キリスト様である。……完全にましまし、慈愛温柔、しかも厳格に在す人格を有しておられるイエス様である。信ずる者の胸中にいつもおいで下さり、霊を以て悪を離れ、完全完徳に導かんと、日夜心を砕いていて下さるのである。
>
> キリストは人ではない。之に連なり偕にいて頂いて、我らは永遠の生命を与えられ、真の平安と幸福を与えられるのである。彼は神にして人である。彼を信じて不思議と身は此の世の者でなくなり、死して生き、つきぬ希望に生きることができるのである[53]。

４．長谷川の信仰生涯

その晩年にカーライルの『英雄崇拝論』を訳して出版した長谷川は、カーライルの中に真の知己を見出していた。それは『英雄崇拝論』の精神が「誠実」であることに、彼が深く共感していたからである。長谷川の生涯は、まことに誠実一途なものであった。

永眠の数日前長谷川を見舞った山本に、長谷川は天国についての疑問を洩らしたという。同じく最後に長谷川の頭を刈ったクリスチャン理髪師鈴木武直には「私の様な罪深い者がほんとうに天国に入れるだろうか」と尋ね、鈴木が「もちろん疑いもなく」と答えると、長谷川はうなずいてじっと目を閉じたという[54]。人は年をとると精神的に衰えて、ただ漠然と来世をあこがれるようになりやすいが、長谷川にはそれが出来なかった。彼の誠実がそれを許さなかった。彼は疑うべきを最後まで疑い、そのために激しい内なる戦いをつづけ、その苦悩の只中でひたすらに信仰の平安を求めて生きぬいたのであった。

そもそも誠実とは、単に偽りを言わぬ、正直である、まじめであるというだけのことではない。強靭、明晰な精神、ものの本質を見通す洞察、仮借なき現実の直視をこそ誠実と言うのであろう。これはおよそ世の宗教とは正反対のものである。宗教は不思議な魔力によって人の霊魂を魅了し心を鈍らせる。そして人はしばしばそうされることをもって信仰が深くなったと錯覚する。この宗教の魔力（エンチャントメント）と戦って、死に至るまで誠実を保持することは容易なことではない。そこには恐しい内的葛藤と霊肉の相剋とがあることであろう。先に長谷川は慎みの人であったと言ったが、「慎み」は聖書では「酔っていない、しらふである」ことであり[55]、それは何よりも宗教に酔っていないことなのである。長谷川の信仰の正統性と、彼の信仰生涯の無教会性とは、実はこの意味における彼の誠実の中にこそあったと言ってよい。

長谷川はまた謙遜をもってその生涯を貫いた人であった。特に晩年の彼に会った人は誰もが、腰が低く、見るからに柔和で謙虚な長谷川に深い感銘を受けた。しかし彼の実人生はとてもそのようなものではなかった。「病中手記」の一節に「少壮国を出て爾来五十幾年、独立自由の信仰生涯を希うて勝手気儘の振舞をなし来り」[56]とあるような、自由独立の雄々しい生涯であった。外観の優しさとは裏腹の、硬質で男らしい痛快な一生であった。何しろあれだけの事業を次々と重ねながら、他人から一銭の借金もしなかったというのである。そして老いてなお、預言者のように不義不正に対する激しい闘魂を燃やしているのである。次は永眠の一年程前の言葉である。

> ふり返って見れば、今日の世の中はどうであるか。罪とけがれに充ち満ちて、不真と不実は到るところに跋扈し、暴虐は日に夜につのり、神聖なるべき神の世界は、土足をもってふみにじられているような状態である。（中略。この状態が具体的にどのようなものであるかが激しい言葉で縷々述べられている。－筆者）心ある者、どうして之を黙視して居ることが

出来ようか。悲憤の涙わき、慷慨の血に燃ゆる者は、神に示された真理の宝剣をぬいて、蹶然立って此の汚濁された俗界の妖雲を一掃して、人心の根本的大革正を行うために、粉骨砕心すべき秋であると思う[57]。

このように長谷川は強い人であった。自尊心も正義心も、そしてその個性もまた強い人であった。その強い長谷川が、結局、自分の手で戦い取ったもののすべてを神に献げ、自分の手で為したことの結果のすべてを主の手に委ねたのであった。彼を謙遜の人であると言うならば、そのことが、そのようにして生きた生涯そのものこそが、長谷川の謙遜であり、謙虚さであったのである。以下はその長谷川の信仰の謙遜を映す珠玉の文字である。

私など神様を知ったと自称自認して早五十年、実のところ偽善者であった。何遍も何遍も罪すれすれに歩き、誘惑に親しむの一面があったのである。但し誘惑に逢うてりつ然とする心、それだけがせめてもの取柄であった。今こうして過ぎし日の述懐を書いているが、この懺悔痛恨こそは此の世へのはなむけである。

私は罪の頭である。いいふりをして悪いことをしていた。……それにまた誘惑にまけ易く、沢山の罪を作った。神様の前に赤裸々にされたら、正に正に地獄行は必定である。それでクリスチャンと称していた。……父は此の際ことごとく己が罪を聖前に懺悔して、浄い真っ白な心に洗われて本当の平安を得たい。これまでも主にありて平安を得ていると信じているのだが、幾度も此の事を繰返して神の無尽なる御愛にひたりたい。

七十二歳聖国に帰る。主イエス君やイシ子に会えるのが嬉しい。罪の記憶は多くあるが凡てイエス様に許して貰う。何等功なき一生であり、涙の谷々を通過したけれども恵みの連続であった。

七十年は一瞬の夢なりき。波瀾重畳の戦なりき。苦悩多かりしも凡て感謝ならざるはなかりき。主にありて凡てよし。我今暫くにして此の偽り多き邪悪の世をすて、真善美の兼ね備わる天の御国に主の慈愛の聖手にひかれて帰らんとす。人生の幸之に過ぐるものあらんや。

身も魂もゆだねまつればイエス様に　心は安し春の花園[58]

V　おわりに

話を終わるに当たって、長谷川周治の生涯の使信（メッセージ）は何か、ということを一考しておきたい。彼の信仰はいかなる福音を語り、彼の信仰生涯はいかなる意味において福音の慰めであり、励ましであるのか。

ここで、長谷川が傾倒したカーライルの言葉を引こう。これは内村がアメリカの友人Ｄ・Ｃ・ベルへ書き送った手紙の中に引用しているもので、『カーライル・エマソン往復書簡集』にある彼の言葉である。

> 著述こそは永遠的事業に侯。講演は小麦を粉にひくが如きものに有之、今日のパンとは相成るべきも、明年の刈り入れは期し難く候 ── されど著述もまた数うるに足らず候。ただ、生くることのみ偉大に侯。その広さは限りなく、その時は窮りなく、死これに伴い、天も地獄もまたこれに属し申侯。ああ！ [59]

長谷川は平和主義を実践し、平和のために戦う多くの同志を支えた。若くして身を立て、孤軍奮闘ゴム事業を起し、私財を投じて多くの信仰書籍を出版した。しかし、これらの赫々たる業績も、彼の誠実で謙遜な生涯、誠実とか謙遜という人間的 徳（バーテュー） がそのまま信仰的徳であるような信仰に生きた、長谷川の信仰生涯そのものの光の前には、その輝きを失う。まことに「講演や著述は数うるに足らず、ただ、生くることのみ偉大」なのである。長谷川はその７２年の生涯をもって、この真理を証言したのであった。

事実、長谷川の生涯をふり返って痛感させられることは、人の一生は彼が何を言い何をしたかによってではなく、彼が何のために、何によって生きたか、いや生かされたかによって決まるということである。たとえその一生がどんなに小さくあろうと、たとえその人間にどんなに欠陥があろうと、これを神の御手に委ねるとき、神はこれを「己が有（もの）」（内村鑑三 [60] ）として受けいれ、和解と平和の福音の使者として下さるのである。長谷川の生涯が「信仰によって、今もなお語っている」（ヘブル11・４）使信は、実に、この慰めと励ましに満ちた福音の真理である。

結びに、聖書の言葉を一箇所読むことにしたい。「テサロニケ人への第一の手紙」４章11節のパウロの言葉である。

> そして、あなたがたに命じておいたように、つとめて落ち着いた生活をし、自分の仕事に身をいれ、手ずから働きなさい。そうすれば、外部の人々に対して品位を保ち、まただれの世話にもならずに、生活できるであろう。

この「つとめて……なさい」のところは、ニュー・イングリッシュ・バイブルによると「……をあなた方の大志（アンビション） としなさい」と訳されている [61] 。そして、パウロが「キリスト信者の大志とせよ」と言ったその内容は何かと言えば、静かに、自分の手で働き、名誉ある独立と自由の生活を営めということである。キリスト信者はこの大志と言うべくもないことを大志として生きよ、というのがパウロの信仰であり、その人生観であった。

『手記』の一節に、長谷川もまた記している。「人は聖なる大志（アンビション）に生きるべきである」[62] と。長谷川は、まさにこのパウロの勧め通りに生きた人であった。彼が終生畏敬してやまなかった内村鑑三の言葉で言えば、長谷川周治の生涯もまた一つの「勇ましい高尚なる生涯」[63] であったのである。

(1) 長谷川周治遺稿『偽らざるの手記 ── 或るクリスチャンの一生 ──』1957 年 8 月 1 日、岩井穂積発行。武藤陽一編。出生から第 2 次大戦中までの自伝で、「病中手記」と「妻いし子遺稿」とを付す。B6 版 256 頁。以下『手記』と略す。「病中手記」は「病中手記」と別記するが、頁は『手記』の通し頁である。

(2) 『手記』 3 頁

(3) 同上　21 頁。

(4) 同上　117 頁。

(5) 同上　151 頁。

(6) 同上　162 頁。

(7) 同上　163 頁。

(8) 同上　153 頁。

(9) 同上　163 頁。

(10) 同上　175 頁。

(11) 同上　195 頁。

(12) 「拾インチ天球儀　説明書」 2 頁。

(13) 『手記』 198 頁。

(14) 同上　220 頁。

(15) 同上　220, 223 頁。

(16) 『内村鑑三信仰著作全集』（教文館）第 2 巻 127 頁。

(17) 『手記』 121 頁。

(18) 『内村鑑三信仰著作全集』第 8 巻 74 頁、第 18 巻 209 頁など参照。

(19) 長谷川周治編著『内村鑑三先生御遺墨帖解説』71 頁。

(20) 遺族に寄せられた追憶文から。

(21) 品川力「一基督者の死 ── 長谷川周治氏のこと ──」『越後タイムス』第 2054 号 (1956 年 12 月 9 日号) 2 頁。

(22) 長谷川の告別式における「式辞」の中で長谷川を評したことば。

(23) 『手記』56 頁。

(24) 同上　75 頁。

(25) 同上　163, 162 頁。

(26) 同上　230 頁。

(27) 同上　43, 44 頁。

(28) 『聖書の日本』第 246 号(1956年12月号）11 頁。
(29) 遺族に寄せられた追憶文から。
(30) 同上。
(31) 『矢内原忠雄全集』（岩波書店）第29巻 534 頁参照。
(32) 「昭和日本における基督教迫害に関する〔特別参考〕資料」同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会編『特高資料による戦時下のキリスト教運動２』（新教出版社)311 頁。
(33) 遺族に寄せられた追憶文から。
(34) 『内村鑑三信仰著作全集』（教文館）第21巻48頁。
(35) 遺族に寄せられた追憶文から。
(36) 同上。
(37) 『手記』 185 頁。
(38) 『内村鑑三先生御遺墨帖解説』 146 頁。
(39) 『手記』 234 頁。
(40) 益本重雄訳著『アラム語聖書の研究』第 1 巻、序 6 、 5 頁。
(41) 『偉人英雄の精神』第 1 巻、序 8 頁。
(42) 『聖書講義』第 146 号(1957年 2 月号 ）9 頁。
(43) 『手記』 224 頁。
(44) 同上　141頁。
(45) 同上　200頁。
(46) 同上　 34頁。
(47) 同上　163頁。
(48) 「キリスト教集会の人々」『手記』 209 頁。
(49) 同上　37 頁。
(50) 同上　41 頁。
(51) 遺族に寄せられた追憶文から。
(52) 『手記』 216 頁。
(53) 同上 27, 26頁。
(54) 岩井穂積による。
(55) 口語訳新約聖書で多くの場合「慎み」あるいは「慎み深い」と訳されている σώφρων（その派生語も含めて）に、この意味がある。Souter, A Pocket Lexicon to the Greek New Testament 参照。
(56) 『手記』 230 頁。
(57) 『偉人英雄の精神』第 2 巻、序 5 頁。
(58) 『手記』63, 223, 231, 229頁。
(59) 山本泰次郎『内村鑑三――信仰・生涯・友情』(東海大学出版会）395頁。

(60) 「神に献げよ」『内村鑑三信仰著作全集』第 8 巻57 頁。

(61) “Let it be your ambition.....”

(62) 『手記』71 頁。

(63) 「後世への最大遺物」『内村鑑三信仰著作全集』第 1 巻 250 頁。

長谷川周治　年譜

1884	明治17		長谷川総一郎、ノブの次男として、山形市銅町に生まれる
			（10月21日）。兄一、弟二、妹六
1889	22		（大日本帝国憲法発布）
1901	34	16歳	山形中学を3年級で中退し家郷を出る
			丸見屋に勤務
			海老名弾正、新渡戸稲造の話を聞く
1905	38	20	日露戦争に出征
			中国大陸において各種事業に従事
1907	40	22	半田商店鉱山部に勤務
			救世軍に通い、『後世への最大遺物』を読む
1910	43		（日韓併合）
1912	45	27	大成社、馬来ゴム栽培会社に勤務
			芝浸礼教会で受洗
1915	大正4	30	鈴木いし子と結婚（4月24日）
			『聖書之研究』を読む
1916	5	31	周達社を起こして独立
			長男真太郎誕生
1918	7	33	柏木の内村家の向かいへ転居
			長女静枝誕生
1921	10	36	ゴム加工事業を創業
1926	15	41	杉並区掘之内へ移転、400坪の敷地に工場を建設、
			「堀之内ゴム工業所」と称す
1928	3	43	堀之内3番地に木造3階建の住宅を建築

1930	昭和 5	45歳	平和氷嚢記念白塔を建てる
			多摩川畔中野島に700坪の果樹園をつくる
			ゴム事業を「堀之内ゴム株式会社」に改組
			畔上賢造、原田美実の集会に通う
1933	8	48	会社を解散、個人事業に復帰
1936	11	51	息真太郎、アメリカへ留学
			政池仁との交友
1937	12	52	金沢常雄との交友（日中戦争始まる）
1939	14	54	藤沢武義、矢内原忠雄との交友
1941	16	56	平和舎を起こし、『内村鑑三先生御遺墨帖』その他を出版
			（太平洋戦争始まる）
			住谷天来との交友
1942	17	57	平和舎を閉鎖
			エステル・バーワ、アンナ・パフとの交友
1943	18	58	イシガ・オサムとの交友
1944	19	59	憲兵隊に拘引される（6月）
			ゴム工場閉鎖、休業
			鈴木弼美、渡部弥一郎との交友
1945	20	60	工場全焼（4月）（敗戦）
1946	21	61	息真太郎、アメリカから帰国（日本国憲法公布）
1950	25	65	川崎市中野島へ転居、「鳩の家」に住まう（朝鮮戦争始まる）
1951	26		（対日平和条約調印）
1952	27	67	平和舎の出版事業再開
			山本泰次郎、益本重雄、藤本正高との交友
1954	29	69	妻いし子、永眠（10月29日）
1956	31	71	「東京聖書会」にて「カーライル」講演（3月）
			藤田病院、東京聖母病院に入院（6月7日から9月13日まで）
			『偽らざるの手記』を執筆
			胃ガンのため、堀ノ内の自宅で永眠（10月24日、享年72歳）
			「堀ノ内キリスト教会」で葬儀（10月26日）

参考事項

１．ゴム加工工場製品

氷嚢（クィーン氷嚢、平和氷嚢）　長谷川創案羽二重ゴム引き（特許）
絹風船　長谷川創案ヘソ式空気孔（特許）
台所用ゴムベラ（キッチンエイド）長谷川創案竹柄とゴムベラの取付け（実用新案）
教育機器（小光社、平和舎発売）
　精密地球儀（径10吋絹製バルーン式、英文・和文解説付）
　天球儀（径10吋絹製バルーン式、ラテン文・和文解説付）
　名所・風俗図解地球儀（径10吋絹製バルーン式、和文）
　物産・交通図解地球儀（径30吋絹製バルーン式、和文、「製作者の言葉」付）
　教育玩具・童話絹風船、イソップ物語、歴史人物、発明づくし（大形－英和両文、小形－和文）

２．平和舎刊行図書

藤沢音吉『藤沢音吉遺僕情』1941.5.28
長谷川周治編『内村鑑三先生遺墨帖』1941.5.30（内村鑑三の揮毫、書簡、ノートその他遺墨 100 点のほか、内村の肖像画、序、跋およびあいさつ状。36.5 x 26cm 、厚紙、コロタイプ印刷、綿布表紙。限定1000 部、非売品）
長谷川周治『内村鑑三御遺墨帖解説』1941.8.20
住谷天来『黙庵詩抄』 1941.10.31
藤本正高『宿命か摂理か』 1941.12.25
金沢常雄『信仰短信』1942.4.10
長谷川周治『ひとり旅』 1942.12.21
政地仁『基督教平和論』（出版年月日不明、発禁）
山本泰次郎『キリストははたして神であるか』 1952.1.1
浅見仙作『刑台より楽園へ』 1952.2.5 （1937 初版）
フルード著、山本泰次郎訳『宗教改革の精神』1952.2.20
益本重雄『アラム語聖書の研究』第１～10巻　1952.5.5 ～1953.10.1
カーライル著、平和舎編訳『偉人英雄の精神』第１～３巻　1955.5.10～6.30
はとの家文庫編著『カーライルの宗教的体験と思想』1955.7.31

３．長谷川周治著・訳・編書

拾インチ天球儀、地球儀、各説明書、 1935
内村鑑三御遺墨帖解説、 1941
国立国会図書館調査立法考査局長の問合せに対する回答、 1948
カーライル　偉人英雄の精神、 1955
カーライルの宗教的体験と思想、 1955
偽らざるの手記、 1957.8.1
平和舎刊行書籍の序、跋、書簡、その他

４．長谷川周治に関する文献

藤本正高「長谷川周治のことども」『聖約』第 176 号　1956.10

政池仁「弱者の友長谷川周治氏を憶う」『聖書の日本』第 246 号　1956.12

同　「長谷川周治氏の手紙」『聖書の日本』第 253, 254 号　1957.7 、 8

同　「私の平和との取り組み」『聖書と教会』1978 年 8 月号

品川力「一基督者の死 ── 長谷川周治氏のこと ──」『越後タイムス』1956 年12 月 9 日号

山本泰次郎「死の準備」『聖書講義』第 146 号 1957.2

武藤陽一「長谷川周治翁を偲ぶ」『テコア通信』第50 号　1961.10

同　「長谷川周治の人と信仰」『キリスト教図書』第21 ～27 号、 1971.9 ～ 1980.1

矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第29 巻、 1965.7 、岩波書店

イシガ・オサム『神の平和 ── 兵役拒否をこえて ──』 1971.6 、新教出版社

同　「神を信じて生きるよろこびについて」『戦時下無教会主義者の証言』

岩井穂積「天に国籍をもつ者」『待晨』第 253 号 1972.11

同志社大学人文科学研究所・キリスト教社会問題研究会編『特高資料による戦時下のキリスト教運動２』1972.11、新教出版社（長谷川の「国立国会図書館調査立法考査局長の問合せに対する回答」が収録されている）

オカノ・ユキオ編『資料　戦時下無教会主義者の証言』 1973.8 、キリスト教夜間講座出版部（座談会「あの頃のこと」）

追憶文　金沢常雄、藤沢武義、西木栄治郎など全21 通（すべて遺族、長谷川真および岩井穂積・静枝夫妻に寄せられたもの、未公刊）

（所載）無教会史研究会「無教会キリスト教信仰を生きた人々―内村鑑三の系譜」

新地書房　1984 年 4 月